

研 究 分 野	資源評価	部名	漁場環境部
研 究 課 題 名	アカイカ資源調査		
予 算 区 分	委託 水産総合研究センター		
試験研究実施年度・研究期間	H.3 ～ H.18		
担 当	油野 晃・清藤 真樹		
協 力 ・ 分 担 関 係	遠洋区水研		

〈目的〉

本調査は、春から夏の初漁期におけるアカイカ漁業の対象となっている 170° E 以東の秋季発生中部系群が主対象となっており、本系群の経年的な資源変動については、以前より北海道大学水産学部が中部太平洋（175° 30'E）において、1977 年から毎年 7 月に実施してきた流し網調査によりモニタリングされてきた。しかしながら、北海道大学水産学部によるモニタリング調査は 1999 年をもって中止となっており、そこで、2000 年より水産庁遠洋水産研究所（現在は独立行政法人水産総合研究センター遠洋水産研究所）外洋イカ研究室が、アカイカ本系群の資源変動のモニタリングと資源変動機構の解明のために本調査を引き継ぐこととなり、本県試験船開運丸による用船調査により、下記の事項を目的とし本調査を行っている。

- ・ 盛漁期である 7 月に東経 170 度以東のアカイカ漁場域におけるアカイカ秋季発生中部系群の資源レベルを推定する。
- ・ 盛漁期における海洋構造とアカイカ漁場形成の関係を明らかにする。
- ・ 盛漁期におけるアカイカ触腕の再生個体の出現頻度を明らかにする。また脱落の状況について情報を収集する。
- ・ かつお、ビンナガ、カジキ、シマガツオ、アカイカ、サメ、海鳥、イルカの高次捕食者および小型浮魚類の標本を採集する

〈試験研究方法〉

独立行政法人水産総合研究センターからの委託により、当該センター職員が試験船開運丸に乗船し、用船調査により下記の調査を行う。

- ・ 海洋観測
CTD 観測（水深 1000m、水温・塩分）、ADCP、CTD、透明度、水色、表面水温、クロロフィル分析、等。
- ・ 流し網調査
13 種目合調査流し網 50 反を用いる（調査網 34 反、商業網 115mm16 反）。
操業方法：投網は日没時、揚網は日出から行う。
- ・ ノルパックネット採集
観測用ウインチを用い、ノルパックネット（口径 45 cm、長さ 180 cm、目合 0.35mm）で 150 ～0m の鉛直曳き採集を行う。

〈結果の概要・要約〉

① 調査海域

北太平洋公海域のアカイカ漁場域 ($38^{\circ} 30' - 47^{\circ} 30' \text{ N}$, $170^{\circ} 00' - 175^{\circ} 30' \text{ E}$)、図1のとおり。

② 調査期間

平成15年7月1日～平成15年8月4日(35日間)。

③ 調査項目

58 定点での海洋観測(CTD+ノルパックネット)と、20 定点での流し網調査を行った。

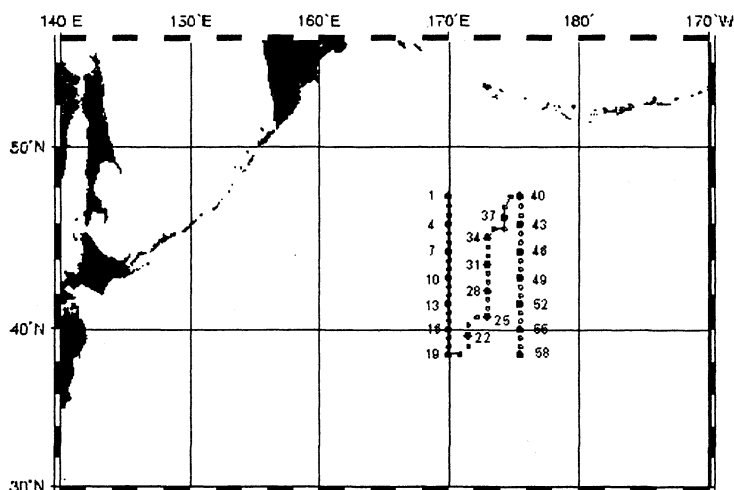


図1 調査定点図の配置 (●: 流し網+CTD+ノルパックネット、○: CTD+ノルパックネット)

〈今後の問題点〉

平成14年度まで、試験船開運丸及び若鳥丸で行われていた本調査も、平成15年度からは開運丸1隻のみでの調査となり、また航海日数も短縮されるなど縮小傾向となっており、今後の調査の継続については予算的に厳しい状況となっている。

しかしながら、青森県の中型いか釣り船の漁業経営が厳しさを増している中、アカイカ資源の調査に対する要請は極めて高く、本調査データによるアカイカ初漁期の資源動向や漁場把握、さらには、公海アカイカ資源の適切な管理による有効利用のためにも、本調査の継続が強く望まれている。

〈次年度の具体的計画〉

① 調査期間

平成16年7月1日～平成16年8月4日(35日間)(航海数:1航海)
(用船期間:16年7月1日～16年8月4日、35日間)

② 調査目的

- ・ 初漁期におけるアカイカの秋季発生群の加入経路と加入量のモニタリング
- ・ いか釣り漁場における海洋環境
- ・ 北太平洋生態系研究用の標本採集(サメ、マグロ類など)

③ 調査項目

- ・ 海洋観測: 表面水温、水色、透明度、CTD観測、EPCS、ADCP、クロロフィル量
- ・ ノルパックネットによるプランクトン採集
- ・ 漁獲調査: 13種目合(計34反)と商業目合流し網(計16反)によるイカ・浮魚類の漁獲調査

〈結果の発表・活用状況等〉

発表誌: 平成15年度北太平洋アカイカ資源調査報告書 独立行政法人水産総合研究センター遠洋水産研究所